

梅雨明け後の農作物の栽培管理について

令和2年8月6日
長野県上伊那農業農村支援センター

1 共通

- (1) 農作業中の熱中症を予防するため、炎天下の長時間にわたる作業は控え、帽子等日除け対策を万全にし、十分な水分補給と休憩時間を確保する。体調がすぐれないときは作業を速やかに中止する。作業服、帽子は吸湿性・通気性が良く、熱を吸収しない白系統にすると良い。ハウス等の施設内作業については特に気をつける。
- (2) 現地指導会を実施する場合は、日陰を利用するなど開催場所に配慮し、適宜、休憩をとり水分補給を促す。特に、高齢者に対しては、水分補給を積極的に声掛けして体調維持に配慮する。参加者が体調を崩した場合は、早めに応急措置（涼しい場所へ移動し、水分を補給する等）をとり、必要により救急車の出動を要請して医療機関での診察を受けるようにする。
- (3) 天候急変（落雷、突風等）の場合は、参加者を安全な場所へ誘導するなど適切な対応に努める。

2 作物

(1) 水稲

ア 一般管理

出穂後の高温により、胴割粒（出穂後10日間に30℃以上の最高気温）、白未熟粒（出穂後20日間の25℃以上の平均気温、23℃以上の最低気温）が助長されるため下記に留意した水管理を行う。

減水深が1cm/日以下など保水性が高いほ場では、夕方に水を入れ替え水温の低下を促す。

出穂前後20日間の常時湛水や出穂後20日間の夕方にかけ流し灌漑を行う。

長雨により中干しが不十分であった場合も、適期まで落水期の前倒しはしない。落水後も土壌が乾燥した場合には走水灌漑を行う。

イ 防除

病害虫発生注意情報として、7月13日に第3号（斑点米の原因となるカメムシ類）、7月22日に第4号（イネいもち病）が発表された。このため、下記に留意した防除を行う。

(ア) いもち病

出穂前20～5日頃には、コラトップ粒剤5を10a当たり4kgまたはコラトップジャンボPを10a当たり10パック散布する。

穂ばらみ期と出穂期は、ビームゾル、ブラシンプロアブルのいずれかの1000倍液、ビーム水和剤75の4000倍液を10a当たり150L散布する。または、ブラシン粉剤DL、ビーム粉剤DLのいずれかを10a当たり4kg散布する。

(イ) 紋枯病

発生次第、バリダシン粉剤DLを10a当たり3～4kg散布する。

(ウ) 斑点米の原因となるカメムシ類

出穂期2週間前から糊熟期頃までは畦畔除草を避ける。

また、以下のいずれかの薬剤防除を実施する。

出穂期にキラップ粒剤を10a当たり3kg散布する。

出穂7日後にジノテフラン粒剤（アルバリン、スタークル）を10a当たり3kg散布する。

出穂10日後に、スミチオン乳剤、スミバッサ乳剤75のいずれかの1000倍液を10a当たり150L散布する。

ウ 収穫準備

高温により収穫適期の前進が見込まれるので、最新の収穫適期情報を随時、確認して、収穫機（コンバイン等）、乾燥調製施設の準備を進める。

(2) 大豆・そば

ア 排水

長雨により土壌水分が高いほ場では、排水口の整備、明渠と排水口の接続により乾燥を促す。

イ 大豆の防除

(ア) 大豆の紫斑病防除適期は、開花後2週間から4週間頃である。降雨が続くと発生が多くなるので、天候に留意するとともに、着莢部位に十分薬剤が到達するように散布する。アミスター20フロアブルの2000倍液を10a当たり200L、またはベルコートフロアブルの1,000倍液を10a当たり200L散布する。

(イ) マメシクイガの防除は、グレーシア乳剤の2000～3000倍液、スミチオン乳剤の1000倍液を10a当たり200L散布する。ダイアジノン粒剤5を10a当たり4～6kg散布する。

(ウ) カメムシ類の防除は、ダントツ水溶剤の2000～4000倍液、スミチオン乳剤の1000倍液のいずれかを10a当たり200L、ダイアジノン粒剤5を10a当たり4～6kg散布する。

3 果樹

(1) 共通

ア 一般管理

(ア) 品目を問わず、糖度がやや低めで着色が遅れぎみだが、果実成熟はやや早めの傾向にある。

(イ) 受光態勢改善のため、支柱立て、枝つり、徒長枝切り等を行う。

(2) りんご

ア 一般管理

(ア) 梅雨明け後に高温や強い日射に遭遇すると、日焼け果が発生する可能性がある。日焼け果の発生を軽減するために早生品種などでは、寒冷紗などの遮光資材を被覆する。

(イ) 徒長枝整理や支柱たて、枝つりを行って通風をよくし、薬剤がよくかかりやすいよう心がける。

イ 防除

(ア) 黒星病、褐斑病、炭疽病の発生が一部でみられている。8月～9月上旬は、有機銅剤、イミノクタジン酢酸塩液剤、キャプタン剤加用QoI剤（ストロビルリン系薬剤）を散布する。防除間隔を開けすぎず、散布ムラのないように防除する。

(イ) ハダニ類は、園地によって7月下旬から増加している。発生が多い場合は、本年度未使用の効果の高い殺ダニ剤を散布する（連続して同一の薬剤を使わないようにする）。

(3) もも

ア 一般管理

(ア) 着色は遅れているが果肉成熟は進んでおり、収穫前落果が見られる。着色向上のため、必要な場合は反射シートを敷設する。

(イ) 果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。

イ 防除

(ア) 灰星病の発生がみられているため、DMI剤、ジカルボキシイミド系剤、などを予防的に散布する。

(イ) せん孔細菌病は、落葉して間もない落葉痕に感染しやすいため、台風が襲来すると風雨により落葉と感染が同時に起こり、多発しやすい。このため、icボルドー412などで防除する場合は、台風襲来前に実施することが望ましい。なお、効果を高めるためには、9月中旬とその2週間後の2回散布する。

(4) なし

ア 一般管理

(ア) 「幸水」は、外観と熟度はやや進んでいるが、糖度がやや低めの傾向である。

(イ) これから収穫を迎える品種は、熟度の進行に十分留意し、収穫が遅れないようにする。

イ 防除

(ア) カメムシ類の発生は一旦収まっている傾向にあるが、今後の天候によっては発生が心配されるため、発生状況を的確につかみ、必要な場合はネオニコチノイド剤や合成ピレスロイド剤を散布する。

(5) ぶどう

ア 一般管理

(ア) 果粒肥大は良好であるが、糖度、着色、成熟は遅れている。

(イ) 副梢等の発生が多く、棚面が暗い園が多いので、摘心等新梢管理を徹底する。

(ウ) ナガノパープルを中心に裂果の発生が多い。果実袋が裂果により汚れている場合は、裂果粒を取り除く。

(エ) 収穫は、品種ごとに成熟の状況を確認して適切に行う。

(オ) 荷造り時には、病害虫果や障害果（裂果など）の除去に注意する。

イ 防除

べと病の防除に9月上中旬までボルドー液等を散布する。

(6) 日本すもも・プルーン

ア 一般管理

(ア) 雨よけ施設がない場合は、裂果の発生が多い。

(イ) 成熟はバラツキが見られる。

(ウ) 果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。

イ 防除

(ア) 灰星病等の発生が多いので、防除を徹底する

(イ) 雨よけ施設でハダニの発生が多いので、防除を徹底する。

(7) 日焼け対策

ア 樹体の日焼け対策

(ア) 主枝・亜主枝等、骨格枝の背面部は日焼けが発生しやすい。徒長枝はすべて切らずに、間引くか新梢基部を30cmほど残す等して「日除け」枝を設ける。葉がない部位は、白塗材、わら、段ボール等で日除け対策を講じることも有効である。

イ 果実の日焼け対策

(ア) 果樹類の基本として、着色管理等の新梢整理にあたっては果実の日焼けが発生しやすい南西方向の樹冠外部の切除量を加減するとともに、除袋と葉摘みの時期をずらすなど、日焼け果が発生しないように配慮する

(イ) りんご等の着色管理では、日が当たる部位の葉摘みは一度に強く行なわない。また、午後から夕方にかけて葉摘みすると日焼けが少ない。玉回しに適した作業時刻も同様である。なお、果実を回す角度が大きいと日焼けを生じやすいので注意する。

(ウ) りんごの果実への日焼けは、「つがる」「シナノリップ」などの早生種だけでなく「秋映」「シナノゴールド」など中晩生種にも発生するので、発生が懸念される園地では早急に園の南～西側に遮光被覆資材を設置する。また、設置期間は、最高気温が34℃程度以下となる9月上旬までとする。

(エ) ぶどうでは高温乾燥でボルドー液等の薬剤散布を省略すると、さび病の発生が懸念されるので、少雨であっても定期的に薬剤散布を行う。

4 野菜・花き全般

(1) 急激な気象の変化は、作物にとって大きなストレスとなるので、栽培品目の生育ステージや土壌条件などに応じて、かん水など適正な管理を行う。

(2) 施設園芸品目で、強日射が予想される場合には温度上昇や日焼けを防止するため、遮光（遮熱）資材や寒冷紗を用いて、できる限り室内の温度低下に努める。

また、換気扇等を利用して換気の徹底を図るとともに、ハウス側面や妻面のビニール等を取り除

いたり、肩換気を行う。また、施設内外及び周囲の遮へい物を整理するなどして通風の改善を図る。

- (3) 害虫では、ハダニ類やアザミウマ類、コナジラミ類、コナガなどのチョウ目の発生が増加しやすいため、適期防除に努める。高温時の薬剤散布は葉害が生じやすいので、できる限り気温の低い時間帯に散布する。

4-1 野菜

- (1) 施設栽培のトマト・ミニトマトは、室内温度が高いと高段位で着果不良を起こしやすいので、ハウスの側面や妻面を開放して換気に努める。なお、日中の遮光や細霧冷房などは室温低下に有効である。

- (2) 今後、高温乾燥が続くと、カルシウム欠乏による生理障害(縁腐れ、心腐れ、尻腐れ)が発生しやすいので、適宜かん水を行うとともにカルシウム資材の葉面散布を行う。

- (3) 露地野菜のかん水は日中高温時を避け、早朝や夕方に行う。特に、定植後活着するまでの間は観察を怠らない。果菜類は一度に多量のかん水をせず、1回の量は少なく、多回数のかん水とする。うね間かん水を行う際は、ほ場内で長時間の滞水が生じないように留意する。

- (4) きゅうりなど長期間収穫する果菜類では、奇形果など不良果を早期に摘除し、株の負担を少なくして草勢維持を図る。また、古葉や病葉等を摘除し、徐々に新葉に切り替える。

- (5) キャベツ

今後、黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病の細菌性病害や、株腐病等の発生が増加しやすい。細菌性病害は、生育ステージに応じて銅剤、オキシリニック酸剤及び抗生物質剤とその混合剤等のいずれかを使用基準に沿って散布する。なお、銅剤及び抗生物質剤等の高温時の散布は葉害が発生するので注意する。また、結球期の散布及び連続散布は特に留意する。

灌水は結球初期までとする。

- (6) アスパラガス

露地栽培では茎枯病等の発生が増加しやすい。にわか雨(夕立)等により罹病株から病気が拡大するので、できるだけ罹病茎を抜き取り、防除を徹底する。ハウス栽培や雨除け栽培では、茎枯病の発生は少ないものの、雨に濡れやすいハウスサイドからの発病に注意する。

- (7) ジュース用トマト

梅雨期間中の湿害や疫病、輪紋病などの病害の発生により作柄不良のほ場がみられる。また、梅雨明け後の高温により、日焼け果が発生している。病害の防除により茎葉の維持に努めるとともに、わらや遮光資材等で果実をできるだけ被覆する。また、品質低下(規定養分不足)を招かないよう熟期を見極めて適期収穫に努める。

- (8) きゅうり

梅雨の長雨等により、褐斑病、炭疽病等の病害の発生が拡大している。特に露地栽培では、今後の降雨等により被害の拡大が心配されるので、農薬使用基準を順守し防除する。なお、同一系統内の薬剤を連用すると、耐性菌を生じる恐れがあるので避ける。

4-2 花き

- (1) トルコギキョウ

曇雨天の影響から、やや軟弱傾向の生育で着蕾・開花も遅れている。一方、梅雨明けの高温と強日射により、葉先焼け(チップバーン)が発生しやすくなる。ハウスの通風を良くするとともに、日中に遮光を行い、気温・地温の低下に努める。抽だい後の乾燥は切花品質および日持ち性を低下させるため、乾きすぎる場合はかん水を行う。

- (2) アルストロメリア

曇雨天の影響から、やや軟弱傾向の生育となっている。一方、梅雨明けの高温と強日射により葉焼け・花焼けが発生している。ハウスの換気と遮光を徹底する。高地温によりシュート数が減少するとともに、花芽形成率が低下し、秋冬期の収量が減少するため、地中冷却設備のあるほ場では、地温 20℃以下を目標に十分な地冷を行う。ハダニ類など、害虫の寄生が散見される。被害の拡大しないうちに防除を行う。

(3) カーネーション

梅雨期間中は日中の気温が低めに経過したことから、収穫株への高温によるストレスは多くなく、生育進度の遅れは見られないものの、茎は細めとなっている。一方、梅雨明け後の高温により茎の軟弱化、花卉の変色・傷み等切り花品質が低下するため、ハウスの通風を良くするとともに、日中の高温時間帯に30%程度の遮光資材の被覆を行う。

(4) その他

転作田での露地栽培やパイプハウス栽培周縁部など、滞水等を伴ったほ場では、これまでの曇雨天続きで、根傷みを起こしていたり、根張りの弱いことが見込まれる。こうしたほ場では、梅雨明け後の高温や強日射の条件下で萎れが発生しやすい。状況に応じて葉面散布やかん水、液肥等の対応を行う。

5 菌茸

(1) ドアの開閉は、できる限り気温の低い時に行うようにし必要最小限にとどめる。

(2) 日が当たる施設壁面、窓には、よしず、遮熱資材等を使って日除け対策を行う。また、施設の通路へ直接外気が入り込まないようにビニールカーテン等で仕切る。

(3) 空調機器類のフィンやファン、フィルターは、運転効率を高めるため定期的に清掃し、室外機周囲を整理整頓する。また、室外機の負担を軽減するため、直接日光が当たらないよう日除け対策を行う。

(4) 換気時間は、生育状況に注意し、高温時には短くして、気温の下がる夜から朝方に長くする。また、高温時の換気は熱交換機を利用する。

6 畜産

(1) 畜舎管理

ア 伝染性疾病や衛生害虫の発生が危惧されるので、消石灰等を畜舎や堆肥舎の周囲に散布して乾燥を図るとともに、消毒車等により消毒、防除を行う。雨水の流入や雨漏りのあったカ所については補修を行う。

イ 畜舎内に温湿度計を設置し、日頃から温度・湿度を観察するとともに、畜舎の中でも暑さや換気がしづらい場所を把握し、対策を講ずる。

ウ 屋根裏への断熱材の設置や、屋根への散水又は消石灰等の塗布により、太陽熱を軽減し舎内温度の低下に努める。また、西日が当る側に植樹、遮光ネット、よしず、寒冷紗等を設置し直射日光を軽減する。ただし、植物を利用する場合は風通しにも配慮し、枝等の整理を適宜行う。

エ 開放畜舎では側壁の窓や天窓、サイドカーテンは全面開放し、自然通風に努める。併せて、畜舎の外回りの環境整備（除草等）により、舎内に溜まった熱気の排出を促す。

オ 扇風機やポリダクト等を設置して家畜へ送風を行う際は、なるべく家畜が暑さを感じる首から肩付近に向けて送風する。リレー式換気では、一定方向に向けて空気の流れを作るように、換気扇の角度を調整する。

カ 細霧装置を用いる場合は必ず送風と同時に行うようにし、各メーカーの設置マニュアルに沿って過湿にならないように注意する。

(2) 家畜飼養管理

ア 密飼いを避けるとともに、暑さのために増加する給水量に備え、給水機の清掃や点検をしながら、常に新鮮な水が飲めるようにしておく。

イ 高温時における採食量の低下を軽減するため、給与時間を早朝や夜間等の涼しい時間帯に移したり、1回の給与量を減らし給与回数を増やしたり等の工夫をする。

また、飼料品質にも注意し、栄養度、嗜好性が高く、新鮮で高品質な飼料を給与し、採食量の確保と暑さによる消耗を防ぐ。また、ビタミン・ミネラル類についても、通常より多めに給与する。

(3) 飼料作物管理

ア 降雨による収穫作業遅れにより、収穫適期を過ぎた牧草・稲ホールクroppサイレージは消化

性の低下など品質低下が懸念されるので、特に乳牛の乾乳末期や泌乳初期等の影響が出やすい時期の牛には給与量を控えるか、少なくし、代替の粗飼料を給与するなど注意する。

また、刈倒し後、降雨に当たり長期間収集できず変敗したものは、給与を控える。

イ やむを得ず高水分で調製する場合は、必要に応じてサイレージ添加剤等を利用する。

ウ 冠水、浸水した飼料畑は、排水溝を設け早期排水に努める。牧草類の刈り取りは8～10cmのやや高刈りとし、再生力が悪くならないようにする。湿害が見られる牧草類は追肥を行い草勢の回復を図る。

エ 飼料用トウモロコシで、日照不足による生育遅延が心配される場合は、雌穂の熟期を確認して適期収穫に努める。